開催地名：東京都清瀬市	
開催日時	令和２年１月 15 日（水）　　15：00 ～ 16：30
開催場所	アミューホール
語り部	菊池　健一　　（宮城県仙台市）
参加者	清瀬市内各避難所運営協議会　約 40 名
開催経緯	低年齢層の災害に対する危機意識が低いこと、避難所運営をはじめ、防災訓練に関わる参加者が少ないことが課題であると認識している。語り部のお話を伺い、防災意識の啓蒙と災害時における自助共助意識の向上につなげたい。
内容	（１）はじめに 私の住む仙台市若林区の七郷地域は、東日本大震災の際の震度は７だった。私は当時、陸上自衛隊航空部隊に勤務していた。発震から避難所運営の実態、そのあとの取組について話したい。 （２）震度７の揺れ 東日本大震災でわが街は震度７の烈震を記録した。震度７の揺れとはどれくらかというと、身を守る動作が一切できないほどである。私は玄関ドアを開けたところであったが、５メートルほど飛ばされた。火の始末や出口の確保もできない。揺れが落ち着いてから、私は近隣の安否確認に回った。若い人は働きに出ていて在宅するのは高齢者か学齢前の子どもが多く、皆泣いていた。14 時 55 分、自衛隊と宮城県警のヘリコプターが偵察のため離陸した。非常な迅速さである。15 時 20 分、宮城県警のヘリコプターが上空からスピーカーで「早く逃げろ」と言った。しかし、ヘリコプターの音で何を言っているのか聞き取れなかった。私は３つの町内を避難誘導して回ったが、通帳と印鑑を探して逃げない高齢の女性がいた。強い口調で避難を促した。後に感謝されたが、災害時は毅然とした態度で避難を促さないといけないと思う。 （３）指揮系統のない避難所 私はその後、蒲町小学校に避難した。避難者は 1,500 名であった。体育館で避難場所として利用できるのは約 350 名である。そこに 1,500 名が詰めかけた。問題は指揮系統がないことである。各町内会では自主防災組織が確立されており、訓練もしていた。しかし、訓練に集まる人はいつも同じメンバーであり、その町内会が４、５つほど一緒になるのである。誰も陣頭指揮を取りたがらない。「早くしろ」と罵声が飛ぶ。私はその夜、町内会長を集め、避難所運営組織の立ち上げを提案した。主要なポストは各町内会長に担当してもらった。住民にとって町内会長は顔見知りであり、情報伝達もしやすいので、避難所のスペースも町内会ごとに区切ることにした。

	（４）様々な問題 　最も困ったのはトイレである。仮設トイレが３つしかなかった。また、当日はみぞれであり、グラウンドに作ったので地面が泥田のようになりたどり着けない。男性は外で用を足せるが、女性はそうはいかない。最も大変だったのは高齢の女性であり、漏らす人もいた。また、ペットを連れている人に対して非難する人もいた。しかし、ペットには人間を癒やしてくれる効果もあると考え、ペット連れの家族用に別の部屋を用意した。 　通信手段の不全にも苦しめられた。指定避難所になっている学校には防災無線があるが、操作方法を誰も把握していない。以来、私たちは防災訓練には必ず防災無線の操作要領を入れている。 　また、避難所にはマスコミの取材が入るケースがある。避難所内のあちこちでインタビューに対応しては、誤った情報が流れる可能性もあるので、マスコミ対応窓口を決めておくべきだ。さらに、避難所には芸能人などの慰問がたくさん入る。多数訪れるので疲れる人も出て、午前１回午後１回にしてもらった。さらに、避難期間中は自警団を２名１組で編成し、22 時から６時まで町内を回らせた。 （５）運営訓練に子どもたちを 　避難所では、中・高校生はじめ、子どもたちが大活躍してくれた。震災後、私は学校に働きかけ、体育館を避難所に見立て子どもたちを対象に避難所運営訓練を行っている。また、町内会で自主防災訓練をするときも、中学生の子どもたちが防災教室を実施している。中学生が小学生に説明するので一生懸命になり、防災意識の向上につながっていると思う。
開催地より	震災時の初動対応の大切さと、避難所運営の難しさを感じた。個々の町内会や避難所のコミュニティなどでも災害に対する意識を高め 、訓練を実施していくことが大切だと思った。